台湾人の日本評価

渡辺利夫（拓殖大学学事顧問）
一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十二月より現職。

私は、台湾統治に精魂を傾けた日本人の中に、明治の時代精神が最も鮮やかに映し出されているのではないかと考え、彼らの人生を現代に蘇らせるという仕事にこのところ忙殺されている。先月号の本コラムに、台湾統治開始からわずか十年後の、いまだ統治の成否定かならぬ時期に、その後の事実からみて実に正鵠を射た評価を長文の論説として認めた「タイムズ」「ニューヨークタイムズ」の記事への深い敬服の一文を寄せた。

翻って、それでは、現在の台湾の人々が日本の統治時代をどのように評価しているのか。そのことを知るためには、中等教育レベルにおいて統治時代のことがどのように教えられているのかをみるに如くはあるまい。李登輝元総統のもとで本格的に進められた政治的民主化の過程で生まれた中等学校（中学校）の標準的な歴史教科書が「認識台湾」である。もっとも、この教科書は二〇〇〇年に登場した陳水扁政権下でのカリキュラム再編により、社会学習領域の一部に組み込まれ「認識台湾」という科目は存在しなくなったが、記述はかつての「認識台湾」のそれが現在もそのまま踏襲されている。この教科書において、日本統治はどのように記されているのか。

日本統治時代における「社会の変遷」の項目をみてみると、次の五項目、すなわち（一）人口の激増、（二）纏足、弁髪追放の普遍化、（三）時間厳守の観念の養成、（四）遵法精神の確立、（五）近代的衛生観念の確立、が取り上げられている。例えば「遵法精神の確立」では、次のように解説されている。保甲とは、台湾伝来の村落自治組織のことである。

「総督府は警察と保甲制度を用いて有効に社会支配を達成し、犯罪の防止と秩序の維持を厳密に行ない、民衆が射倖心で法律を犯さないようにした。学校や社会教育を通じて近代法治観念と知識を注入し、秩序と法律を尊重することを学ばせ、それに加えて司法は公正と正義を維持することで、社会大衆の信頼を獲得した。この影響で、民衆は分に安んじ、規律を守るなどの習慣を養い、遵法精神を確立した」

もう一つの隣の国の「歴史認識」とは真逆である。